

9

国語問題紙

経済学部 1・2 部

人文学部 1・2 部（英米文化学科）

2024 年 2 月 9 日

11:50～12:50（60分）

注 意 事 項

—— 注意事項は裏表紙にもある。問題紙を裏返して必ず読むこと。——

1. 国語の問題紙は全20ページである。
2. 解答用紙は問題紙の中に折り込まれている。
3. 解答はすべて解答用紙の指定された欄に記入すること。
4. 試験開始の合図があるまで問題紙を開いてはいけない。

試験終了まで退室してはいけない。

5. 受験番号の記入については裏表紙を参照すること。

次の文章を読み、後の設問に答えよ。

通常の科学史では、コペルニクスによる地動説の提唱が近代天文学ひいては近代物理学の出発点であると語られている。しかし物理学の観点からすると、近代科学をそれ以前のもの^cと分つ真の転換点は、むしろケプラーと考えるべきである。というのも、なるほどコペルニクスは太陽の静止する太陽系を唱^aえたけれども、天文学がいかなる科学であるのかという点では、古代以来の考え方から完全には脱皮していなかったからである。

それにたいしてケプラーによる天文学の改革は、たんに太陽を中心におき、また円軌道を楕円軌道ととり替えたことにはとどまらない。彼の改革の本質的な点は、惑星運動の動因として太陽が惑星に及ぼす力という観念を導入し、天文学を軌道の幾何学から天体動力学に、天空の地理学から天界の物理学に変換させたことにある。その根底には「天文学は何を課題とする学問であるのか」についての考え方の決定的転換があった。ケプラー自身、ずっと後に書いた^b畢生^bの大作『コペルニクス天文学概要 (Eptome astronomiae Copernicanae)』（一六一八年に第一―三巻、二〇年に第四巻、二一年に第五巻、以下『概要 (EP)』）では、第一巻冒頭^cの「天文学とは何か」という問いにたいして「それは地上にいるわれわれが天や星に着目するときに生じる事柄の原因 (causa)」を提示する科学である。……それは事物や自然現象の原因を求めるがゆえに、物理学 (physica [自然学]) の一部である」と答え、さらに「通常は物理学 (自然学) は天文学には不必要と思われる。……しかし実際は、それはこの分野の哲学^注にはもつとも関係が深く、天文学者には不可欠のものである」と記している (EP, pp. 23, 25)。このことは現代人にはあたりまえだが、ケプラー以前にはそうは考えられていなかった。

それまでの天文学の課題や目的は、ギリシャ天文学で使用されていた「現象を救う¹」という言葉に端的に表現されている。六世紀の新プラトン主義者でアリストテレスの注釈書を書いたシンプリキオスは、^注プラトンの天文学を次のように特徴づけている。

プラトンは、天の物体の運動は円形で一様でつねに規則的であるという原理を設けている。その上で彼が数学者たちに課した問題は、諸惑星が示す現象を救¹うするためには、円形で一様で完全に規則的などのような運動が仮説として受け入れられるであろうか、というものである。

(注) 哲学…ケプラーの時代、哲学は科学全般を含むものであった。

(注) プラトン…紀元前五～四世紀の哲学者。

つまりひとつには、このように惑星の運動が等速円運動の組み合わせであるということが、これまでアプ^注リオリに前提とされていたことがある。しかしより本質的な点は、天文学は観測される惑星の運動をなんらかの数学的・幾何学的な仮説（モデル）によつて計算でき、予測できればそれであり、そのかぎりでは、惑星は現実にもそのような動いているのか、またなぜそのように動くのかといった、存在論的ないし自然学的・因果的な問いを発するものではないという自己限定²にあった。

これにたいしてケプラーは、一六〇〇年の末頃に書いた小冊子『ウルサスにたいするチコの擁護（*Apologia pro Tychone contra Ursum*）』（以下『チコの擁護』）で次のように記している。なるほど「天体の位置や動きをできるかぎり正確に予言するものは、天文学者としての責務をよくはたしている」と言える。しかしそれだけでは足りない。「というのも、彼が語っているのは天文学者の第一の責務ではあるけれど、事物の本性を探究する哲学者の共同体から天文学者が締め出されるべきではないからである。」その具体的なゆき方は、ケプラー天文学のコペルニクス天文学との対比で明らかになる。

^注 アリストテレス自然学にあつても、天上世界の物体は第五元素よりなる完全な物体でそのとりうる運動が等速円運動のみであることは、疑問の余地のない事実と考えられていた。したがつてプトレマイオスの天文学においてもまた、その理論的作業は、惑星の位置の観測値をよく再現するように円軌道⁴を組み合わせることに終始していた。結局のところプラトンであれプトレマイオスであれ、太陽と惑星のあいだに力が働きその力で惑星の運動がコントロールされているといった視点はまったくなくない。そんなわけで、古代以来ケプラー以前まで、天文学とは運動の物理的原因を問わない軌道の幾何学であった。他方では、当時の自然学（物理学）は定性的なもので、数学的な天文学には本来的になじまないと見られていた。ところでコペルニクス地動説の基本的な主張は、惑星の運動に見られる留や逆行という不規則性がじつは地球の運動による見せかけであり、それゆえ地球が他の惑星と同様に静止太陽のまわりを回転しているとすればそれらの現象は無理なく説明されることにあつた。もちろんコペルニクスは、単に太陽を静止させただけではなくその『天球の回転について』において「この光り輝くものを四方が照らせる場所以外のどこに置くことができようか。……太陽は王様の椅子に座つてとりまく天体の家来を支配している」と語り、太陽が特別な存在であることを認めている。そしてまた

重力は自然のある欲求にほかならぬと思う。宇宙の建築者の高い配慮によつて、その部分が球の形に結合して一にし

（注）アプ^注リオリ……経験に依存せず、それに先立っていること。

（注）アリストテレス：紀元前四世紀の哲学者。宇宙を、月の天球の内側にある月下世界と、外側の天上世界に分け、月下世界の地球や地球上の事物は四つの元素の混合から成り、天上世界の天体は第五元素から構成されるとした。天動説を採る。

（注）プトレマイオス……二世紀頃の天文学者・地理学者。天動説を大成した。

て全体であるように、与えられたものである。この性質は太陽にも月にも惑星にも同じように付属していると考えられる。

と語り、すべての天体に平等に重力を認めている。それゆえコペルニクスにとっては、地上での重量物体の落下は宇宙の中心にむかう自然運動ではもはやない。月下世界と天上世界という二元論を見捨てて地球を他の惑星と同レベルの存在と捉える立場からすれば、それは当然のことであろう。

しかしコペルニクスの重力はあくまで天体上の物体——天体の破片——が母なるその天体にむかう傾向、それぞれの天体が球状に凝集しようとする性質であって、その根拠は全体にたいする部分の共感にあり、さかのぼれば類似のものはいっしょになろうとするという古代以来の論理に帰着する。したがってそれは異なる天体間に働くものではない。⁵ましてやコペルニクスは、太陽の駆動力によつて惑星が周回しているとも、あるいは太陽の引力によつて惑星が太陽のまわりに繋ぎとめられているとも考えていない。

というのも、コペルニクスもまた「球のなしよい運動は回転であること」、そしてまた周期的な運動は「円運動でなければ不可能」という根拠にもとづいて惑星の運動は「円形であるか、または多くの円を組み合わせたものであること」を当然の前提としているからである。したがってコペルニクス天文学は、なるほど太陽——正確には地球軌道の中心にある平均太陽——を中心とするものではあつても、やはり円運動のアプリオリズムに囚われた軌道の幾何学であつた。つまりプトレマイオスのものにくらべて単純性がいくぶんか増しているという点では数学的に改善されているにしても、天体の運動にたいする物理学的・動力学的な理解は見られず、そこからは惑星を駆動し制御するのは何かという問題意識はやはり出てこない。その意味ではルター派の僧オジアンダーが『天球の回転について』に匿名で書き加えた「序」にある、太陽中心説は「観測に合う計算を与えるということだけで十分な仮説」であり、それ以上にその「仮説」が正しいかどうかは論ずるに及ばないし、それが事実であるとして押しつけるものでもないという但し書きは、ただたんに頑迷な保守派や教会権力にたいする卑屈な弁明であつただけではない。たとえそれがコペルニクスの主観的意図に反していたにせよ、コペルニクス理論の客観的限界を表明するものでもあつたと言えよう。一六〇二年にイタリアのカンパネッラが書いた『太陽の都』には「コペルニクスは小石を並べて計算し、プトレマイオスはそら豆を並べて計算するようなもので、⁷『どちらも』本当のもので計算しているのではなく、いわば金貨のかわりに賭け札で支払いをしているようなものです」とあるが、こ

れが当時の大方の理解であつた。いずれの理論も自然学的・存在論的な真理を主張するものではないと見られていたのである。

これにたいしてケプラーの『宇宙の神秘 (Mysterium cosmographicum)』(一五九六年、以下『神秘 (MC)』)で特徴的なことは、^{*}「コペルニクスの企図は天文学にかかわっている」のたいして「私は物理学者のような役割を担っている」とあるように、「天文学」と「物理学 (自然科学)」が対比され、しかもその点がコペルニクスとおのれケプラーの^d径庭として宣言されていることにある (MC, pp. 50, 59)。「読者への序文」では、太陽に見られる運動が地球の運動による見せかけであるということを「コペルニクスは数学的な根拠にもとづいて証明した」にすぎないが、ケプラー自身はそのことを「物理学的な根拠にもとづいて、あるいはそう言つてよければ形而上学的な根拠にもとづいて証明しようとした」とある。すでに処女作『神秘』の時点で、その後の自身による天文学の改革の第一歩が記されていたのである。

ケプラー以前の天文学と物理学のこの区別は現代の私たちには理解し難いところで、そのために、少し長いけれどもシンプリキオスが引いているゲミノス (紀元前一世紀のロードス島の数学者・天文学者) の説明を——ここでも孫引きではあるが——引用しておこう。

天および星辰の本質や、その力や、その質や、その生成と消滅の研究は、自然科学 (物理学) の理論に属する。自然科学はまた、これらの天体の大きさや形状や配置にかんする証明を与える能力も有している。他方で、天文学は、その前者については論じない。天文学者の論証は、天にはたしかに秩序があるということを前提として、その秩序にのみかわる。天文学は地球や太陽や月の形状や大きさや相対的な距離を語る。それは諸天体の食や合や、それらの運動の定量的あるいは定性的な性質を語る。……しばしば天文学者と自然科学者 (物理学者) は同一のテーマを取り上げる。しかしそのような場合、彼らのゆき方は異なる。自然科学者はそのすべての命題を、物体の本質や力やそのもつともよい方から、あるいはその生成や変化から証明しなければならない。これにたいして天文学者は、量と形に関連して、ないし、問題の運動の大きさとそれに要する時間から、命題を立てる。概して自然科学者は、研究する効果の原因にこだわら、それを産み出す力にその注意を向ける。それにたいして天文学者は、その同一の効果にたいして外的に関連している状況から証明を引き出し、……原因を追究しようとはしない。

そしてはるかに時代がくだって一六世紀にイタリア人ベニート・ペレイラ（一四六〇頃―一五五三）は「自然科学者と天文学者はおなじ天を扱うにしても、異なるやり方でおこなう。ゲミノスは自然学と天文学のこの違いを申し分なく明瞭に描き出している」と記している。この区別は、古代以来ケプラーの直前にいたるまで、ヨーロッパでは二千年間にわたって受け入れられていたのである。

⁸ケプラーはまさにその区別をうち砕き、さらには、シンプリキオスやゲミノスにおいては形而上学的なものを意味していた「原因」を自然学的なものと読みかえることにより、物理学としての天文学すなわち天体動力学・天界の物理学をはじめ提唱したのである。そのことは天文学に動力因と因果概念を導入したことにはとどまらない。逆に、⁹それまでは定性的なものでしかなかった自然学を数学的な物理学に作り直すことをも意味していた。これをもつておなじラテン語 *physica* にたいする訳語が「自然学」から「物理学」に変化するとしてよい。

（山本義隆『磁力と重力の発見 3 近代の始まり』による。ただし一部変更した。）

問一 波線 a、c、e の漢字の読みをひらがなで書け。

問二 波線 b、d の単語の意味は何か。それぞれ、その意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- b 畢生 ア 一生涯 イ 最終 ウ 心身の力の全て エ 定評があること
- d 径庭 ア 論点がかみ合わないこと イ 優れていることと劣っていること ウ 二つのもの間にある隔たり
- エ 人の力量を計る基準となるもの

問三 傍線 1「現象を救う」とはどのようなことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア 観測される惑星の軌道の計算や予言をする人を助けること。
- イ 惑星が示す運動を人間の感覚でも観測しやすくすること。
- ウ 観測される惑星の位置や位置の変化を予測すること。
- エ 惑星の本質と同じ程度に惑星の現れの価値を高めること。
- オ 図形に関する学問が惑星に関する学問の進展を支えること。

問四 傍線2「自己限定」とはどのようなことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア 天文学者が、天文学の序列を規定したということ。
- イ 天文学が、依拠する前提を明確にしたということ。
- ウ 天文学者が、自らを数学者として定めたということ。
- エ 天文学が、取り組む課題を限ったということ。
- オ 天文学者が、数学の問いに限界を置いたということ。

問五 傍線3「事物の本性を探究する哲学者の共同体から天文学者が締め出されるべきではない」とあるが、どのようなことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア 天文学者は事物の本性を探究したとしても共同体から排除されないということ。
- イ 天文学者も事物の本性の探究に携わってよいはずということ。
- ウ 天文学者は哲学者との協同の機会を与えられるべきということ。
- エ 哲学者が、事物の本性を探究する天文学者を敵対視するはずがないということ。
- オ 天文学者が責務を果たしているなら哲学者の仲間に入れられるべきということ。

問六 傍線4「円軌道を組み合わせることに終始していた」とあるが、なぜか。その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア 他の天文学者との違いを出せると思ったから。
- イ 理論問題の解決にやりがいを感じていたから。
- ウ 様々な方法を試すことに懐疑的だったから。
- エ それが天文学者の第一の責務と自認していたから。
- オ 天体が円運動以外の運動をするとは考えられなかったから。

問七 傍線5「それは異なる天体間に働くものではない」とあるが、なぜか。その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア コペルニクスの重力の根拠は、古代から続く論理にまでさかのぼることができるから。

イ コペルニクスの認める重力は、地球上の物体が地球から受ける力だけに限られるから。

ウ コペルニクスの考える重力は、天体が天体ごとに一つになるうとする性質だから。

エ コペルニクスの重力は、宇宙の建築者がそれぞれの天体に付属させたものだから。

オ コペルニクスにとって、部分が全体に共感することは類似したものの同士が集まることに等しいから。

問八 傍線6「コペルニクスは、太陽の駆動力によって惑星が周回しているとも、あるいは太陽の引力によって惑星が太陽のまわりに繋ぎとめら

れているとも考えていない」とあるが、なぜか。その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 惑星はそれ自身で円運動するということを自明なことだと考えていたから。

イ 太陽が、離れた惑星に遠隔的な作用を及ぼすという考えをまだ知らなかったから。

ウ 諸惑星が太陽の周りを回転しているという理論を提唱したばかりだったから。

エ 見たり感じたりできるものののみを実在とみなし、そうでないものには懐疑的だったから。

オ 太陽と惑星の関係よりも、惑星と惑星の間の関係により一層注目していたから。

問九 傍線7「金貨のかわりに賭け札で」とあるが、本文の著者は、金貨と賭け札をそれぞれ何の喩えと解しているか。その説明として最も適切

なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 金貨を客観の喩え、賭け札を主観の喩えと解している。

イ 金貨を真理の喩え、賭け札を仮説の喩えと解している。

ウ 金貨を小石の喩え、賭け札をそら豆の喩えと解している。

エ 金貨を太陽の喩え、賭け札を惑星の喩えと解している。

オ 金貨を事実の喩え、賭け札を弁明の喩えと解している。

問十

傍線8「ケプラーはまさにその区別をうち砕き」とあるが、その少し前では、傍線※「コペルニクスの企図は天文学にかかわっている」のたいして「私は物理学者のような役割を担っている」とあるように、「天文学」と「物理学〔自然学〕」が対比され」と書かれていて、ケプラーが天文学と物理学を区別したと言われている。それでは、傍線※の箇所と傍線8の箇所はそれぞれどのようなことを言っているのか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 傍線※の箇所は、天文学と物理学の区別を理解し難いものとみなしつつ、ケプラーがその区別について語ってしまったということ、傍線8の箇所は、いつそのこと、明晰でない区別を否定して、ケプラーが新たな近代科学を確立したということ。

イ 傍線※の箇所は、コペルニクスとの対抗上、ケプラーが天文学と物理学の区別を利用して自らの立場を述べたということ、傍線8の箇所は、物理学への理解が進み、ケプラーがもはやその区別に拘泥しなくなったということ。

ウ 傍線※の箇所は、天文学と物理学の古代以来の区別をまだ受け入れていたとき、ケプラーがその区別に触れたということ、傍線8の箇所は、ケプラーが自身の方法論に自信を持つようになり、その区別を積極的に否定するようになったということ。

エ 傍線※の箇所は、天文学と物理学の従来の区別を前提するなら、自分は物理学のゆき方で探究するとケプラーが言ったということ、傍線8の箇所は、従来の区別を排して、ケプラーが物理学の一部として天文学の探究をしたということ。

オ 傍線※の箇所は、天文学よりも物理学に憧憬を抱いていたため、ケプラーが物理学への志向を語ったということ、傍線8の箇所は、ケプラーがこだわりを捨てて、物理学だけでなく、天文学の探究も行うようになったということ。

問十一

傍線9「それまでは定性的なものでしかなかった自然学を数学的な物理学に作り直す」とあるが、なぜ作り直さなければならなかったのか。その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 天文学も自然学も、ともに古代の想定に引きずられているところがあり、数理化によってそれらを改め、近代科学へと脱皮させる必要があったから。

イ 当時新しい枠組みの学問がいくつも出てきていて、それらに伍すためには、数学という厳密な学問によって基礎づけなければならなかったから。

ウ もともと自然科学は数学を応用していたが、この時代に数学が発展を遂げたため、自然科学で応用する数学も最新のものに仕上げる必要があったから。

エ 優れた科学者は数学的才能に恵まれている場合が多く、自分が取り組む科学を数学の形式に従って展開しようとする意志が実現しやすいから。

オ 数学的に表現された事柄に対しては、どのような原因でもいいわけではなく、数学的に表現できる原因を明らかにしなければならないから。

次の文章を読み、後の設問に答えよ。

家族のあり方が多様化していると言われている現代ではあるが、子どもとの間に「血」のつながり——¹ 遺伝的なつながり——を求める傾向はなお根強い。日本では2015年度に51001人が生殖補助医療技術によって生まれたが、その多くは配偶者の卵子と精子を受精させる人工授精であり、非配偶者間人工授精（AID）の割合は極めて少ない。

不妊治療の利用の増加とは対^Aシ^Aョウ^A的に、遺伝的なつながりのない子どもと養子縁組をするケースは減少傾向か横ばいの状態が続いている。いわゆる「実子」と「養子」を^a峻^a別^aし、前者を特権視する風潮はなお根強く、養子縁組が増えない要因の一つとなっている。

ア

様々な事情で生みの親と共に生活することができない子どもを、彼らと共に暮らせるようになるまで、あるいは自立できる年齢になるまで、一般家庭で養育する里親制度も、厚生労働省が推進しているにもかかわらず、一般に浸透していない。親の病気、経済的な理由、虐待^Bなどによって親と一緒に暮らせない子どもたちは、日本に約45000人と言われているが、そのうち、里親家庭で暮らしている子どもたちは約6000人にとどまり、約39000人が児童養護施設や乳児院で暮らしている。

日本の里親委託率（12・0％）は、上位のオーストラリア（93・5％）や香港（79・8％）と開きがあるだけでなく、下位の韓国（43・6％）等と比べても低く、OECD諸国のなかで最低の水準である。日本にはいまだに、子どもは生みの親のもとで育つべきという親子観が根強く、生まれてきた子どもを社会全体で育てる「社会的養護」という考えが受け入れられていない。

こうした支配的な親子観のもと、近年、生殖補助医療や養子縁組・里親双方に関して子どもの「出自を知る権利」が議論^bの俎^b上にあがっている。

生殖補助医療においては、これまで、カップルに精子提供や卵子提供をする第三者の匿名性が守られてきた。しかし、近年では「提供者の個人情報を知ることが精子・卵子・胚の提供により生まれた子のアイデンティティの確立などのために重要なもの」（厚生労働省）と主張され、提供者の匿名性を廃止する方向に傾きつつある。

また、「養子縁組や里親においては、かつては子どもに出自を隠し、生みの親との交流を断絶させることが子どもにとつ

て良いとされてきたが、現在では反対に、子どもに生みの親の存在を明らかにするほうが子どもにとって良いという考え方が優勢になってきている」（野辺陽子『養子縁組の社会学』）。

子どもの「出自を知る権利」については、概して「生物学上の親について確認したい」という子どもの強い欲求が存在し、生物学上の親を知ることが子どものアイデンティティの確立に必要なという前提のもと、子どもの福祉を目的として主張される。「子どもはできる限りその父母を知り、かつその父母によって養育される権利を有する」とする「子どもの権利条約」第7条にその根拠が求められることもある。

自分の出自を知る権利が子どもにあるという考えは、一見すると正しいように見える。しかし、生物学上の親について知ることが子どものアイデンティティの確立にとって、いかなる意味で重要なのだろうか。そして、出自を知りたいという子どもの欲求は、どこまでその子ども自身の欲求と言えるのだろうか。

イ

*

なぜ、子どもがアイデンティティ——自分が何者であるかについての認識——を形成するために、生物学上の親を知る必要があるのか。

倫理学者のデイヴィッド・ヴェレマンは、（１）親との類似性に基づく自己知と（２）自分の生を物語る観点や文脈としての出自という二つの理由を挙げている。とりわけ、前者の論点は、子どもがたんに生物学上の親の情報を得るだけでなく、生物学上の親に会って直接知ること（acquaintance）が必要だとしている。

（１）子どもが自分の能力や特徴を知るためには、たんに自分を観察するのではなく、自分に似ている人を通して自分を見ることが必要である。大抵の場合、人は身近にいる両親やきょうだいの類似や相違を通じて、自分について直観的に知ることができる。そのため、「生物学上の親族を誰も知らないというのは、「自分を映し出す」反射面のない世界のうちで、つねに自分には盲目のまま、さまようようなことだ」。

（２）子どもは生物学上の親や祖先を知ること、自らの行為や生を両親や祖先から続く物語のなかに位置づけ直し、この物語的な統一性のなかで自己のアイデンティティを形成することができるようになる。

ある人のアイデンティティは、①（学歴や職業）に限られないし、その人の一生だけに閉じているわけでもない。例えば、自らの人種的アイデンティティや民族的アイデンティティは、自分で選択したわけではなく、②と切り離せない。出自について知ることは、自分のライフ・ストーリーを一個人の人生を超えたより広い文脈——ファミリー・ヒストリー家族の歴史——のもとで理由づけ、人種や民族を自らのアイデンティティとして引き受け直すことを可能にする。

実際、自分のアイデンティティに疑問を抱いてきた人々が、自身の「ルーツ探し」によって、よりふさわしいアイデンティティを構築し直すことがある。例えば、日本軍政下のインドネシアで生まれたある日系オランダ人は、日本人の父親を突きとめ、自分が生まれた経緯を知ることによって「日本人の子」としてのアイデンティティを再発見するに至る。中国残留邦人三世の人々は、一世や二世への聴き取りを通じて、「三世」としてのアイデンティティを再構築したりすることがある。こうした人々は、祖先や生物学上の親との関係を知ることによって、自分のアイデンティティを物語る観点を得られたのだと言える。自分の出自を知る可能性が閉ざされてしまうと、自分の生をより広い文脈のなかに位置づけ、自分が（意図することなく）置かれていた状況を再解釈して、自分一人の観点からは見えてこなかった意味を、自らの生に与え直すことが困難になってしまう。

確かに、自分の祖先や出自に関心をもたない人も少なくない。しかし、そうした人も「自分がどこから来たのか」を知っていることで、すでに何がしかの恩恵を得ている。また、自分の祖先や親のようににはなりたくないと思っている人も、まさに彼らを「③」にすることができるという点で、出自についての知識の重要性を示している。自分の出自を知らなければ、祖先の生き方や祖先から引き継ぐアイデンティティを価値あるものとみなすことと同様、そうした価値観を批判したり、それにアラガ^cったりすることもできなくなるのだ。

以上のように考えると、匿名の形で卵子や精子を提供することも、そうした提供を受けて子どもをつくることも、生まれてくる子どもが生物学上の親を知ることを不可能にし、子どものアイデンティティ形成にとって重要な生物学上の親子関係を断ち切ってしまうことになる。出自を知る権利をすべての子どもに認めることは、子どもがこうした不利益を被らないために必要だと考えられるだろう。

ウ

*

ヴェレマンの議論は、血縁や生物学上の親子関係が重視される背景について、多くのことを教えてくれる。けれども、こうした見方は、生物学上の親子関係が子どものアイデンティティ形成にとって必要不可欠だとみなすことで、血縁を特権視する親子観を正当化したり、再生産したりすることにつながりかねない。

生物学上の親を知ることが、そこまで重要視される必要があるのだろうか。そして、子どもからその機会を奪うことが、道徳的に間違っているということになるのだろうか。哲学者のサリー・ハスランガーは、二人の黒人の養子を育てた白人女性として、ヴェレマンの二つの論点に反論し、血縁を特権視する親子観を批判する方途を探っている。

(1) 類似性に基づいて自分について直観的に知る際に、子どもが依拠しているのは、生物学上の親子観だけでは。通常は、それ以外にも、友達、絵本やアニメの登場人物、スポーツ選手や有名人といった数多くの手がかりがある。重要なのは、子どもの周囲に、自分の個性や特徴を映し出してくれる親しい人がいるということであり、こうした人が生物学上の親である必要はなく、養親や里親やその家族でも構わないはずだ。

エ

また、血縁を特権視する親子観が支配的な社会においては、親子間の外見上の類似性をもっぱら重視され、その他の類似性が見えなくなってしまうという可能性がある。ハスランガーは、彼女と黒人の養子アイザックが似ていると告げて、この可能性を教えてくれた女性の友人の例を挙げている。その友人は、人種の違いから息子と「似ている」と言われたことがなく驚いた彼女に、次のように述べたという。

私はいつも私の息子たちが私に似ていると言われる。私は彼らが私に似ているとは全然思わない。だって彼らは男の子だから。でもこのことは、人々が親子の類似性を探すときには、問題にならないみたい。アイザックがあなたに似ていると人が思わないのは、彼が黒人でああなたが白人だから。肌の色は、人が親子の類似性を探すときには問題になる。でも実際にアイザックの特徴に注意するなら、彼はとてもあなたに似ている。

親子の間のどのような類似性が浮かび上がるかは、その社会でどのような類似性が重視されているかに左右される。ハスランガーとアイザックには、身体面での類似性が見られないにしても、感情や気性の面での類似性が見られる。けれども、後者の類似性は、人種を重要視する社会においては、二人の人種の違いによって容易に覆い隠されてしまう。生物学

的な親子間の類似性を自明視することは、こうした支配的な見方を強化し、より重要であるかもしれない他の類似性を見えづらくしてしまうのだ。

オ

(2) 自分の生を物語る観点や文脈としての出自という点については、どうだろうか。例えば、生まれたときに祖父母がすでに他界していたなどして、彼らを直接知ることができなくても、親や親戚からの伝聞を通して、彼らから続く自分の物語を紡ぐのはそこまで困難ではない。

これと同様に、生物学上の親を直接知ることがなくても、匿名の第三者からの精子や卵子の提供によって生まれた子どもや養子は、生物学上の親について育ての親がもちうる情報や、育ての親が自分を育てるに至った経緯などから自分に通じる物語を描くことができる。

さらに重要なのは、往々にして、周囲の人々や自分によって語られる自己の物語が、親との関係や自分の過去との関係を特定の型にはめて理解させる文化的な図式に従っているということだ。北米でも日本でも支配的なのは、「自然な核家族」(natural nuclear family) 図式と呼ばれるものだ。それは以下のことを「自然」で「普通」なこととみなす。

- (1) 男女が愛し合って結婚し子どもが生まれる
- (2) 子どもは両親の性質を受け継いで生まれる
- (3) 両親は自然に愛情をもって子どもの世話をする
- (4) 子どもは生みの親に育てられることで自然に育つ

これらは「自然」なことでも「普通」なことでも全くなく、親子関係に関する種³の「神話」にすぎない。しかし、この図式は広く浸透しているため、養親や養子もそれにしばしば囚われてしまう。例えば、養親は「自分の生んでない子を本当に愛せるだろうか」とか「血でつながってないと駄目なのか」と悩んだり、養子は「実の子ではないから厳しく育てられている」と思ったりすることがある。

カ

確かに「自然な核家族」図式が支配的な社会では、生物学上の親を知らない子どもは、不利益を被りかねない。この図

式にあてはまらないことで周囲から負の烙印を押されると、様々な差別を受けることがある。

こうした現状に対抗するためには二つの戦略が考えられる。一つは、子どもに出自を知る権利を保障することで、「自然な核家族」図式に自らをあてはめるための手段をすべての子どもに与えるというものだ。もう一つは、④

（小手川正二郎『現実を解きほぐすための哲学』による。ただし、一部変更した。）

問一 波線 a ～ c の漢字の読みをひらがなで書け。

問二 二重傍線 A ～ C のカタカナを漢字に直した場合と同じ漢字を用いるものを次の中からそれぞれ一つ選び、符号で答えよ。

A 対シヨウ

- ア 鳩は平和のシヨウ徴です。
- イ ふたりの相シヨウは最悪です。
- ウ こちらの資料を参シヨウしました。
- エ 自シヨウ有名人の男。
- オ 冬季オリンピックをシヨウ致する。

B 虐タイ

- ア 代役が控え室でタイ機しています。
- イ 重機を使つて建物を解タイする。
- ウ だめだった場合の代タイ案も用意しています。
- エ 賛成派と反対派のタイ立が激化している。
- オ すぐ投げ出してしまふ忍タイ力のなさ。

C アラガったり

- ア 作戦がコウを奏した。
- イ 紛争で町はコウ廃した。
- ウ 他国が実コウ支配している地域。
- エ 政府は徹底コウ戦を呼びかけた。
- オ 長期戦ではコウ守のバランスが大切だ。

問三

本文には次の段落が抜けている。これを入れるのに最も適切な箇所を文中の空欄ア～カから一つ選び、符号で答えよ。

また、こうした考えに従うと、養子縁組の場合も、生みの親が誰かわかり、生みの親に会えることは子どもに必要であり、養親がそれを妨げることは道徳的に間違っているということになる。その場合、養子にとっては、生みの親との関係を断つことなく、養親や養子が生みの親と交流して養育がなされる「開かれた養子縁組」(open adoption)が望ましいということになるだろう。

問四

傍線１「子どもとの間に「血」のつながり——遺伝的なつながり——を求める傾向」とあるが、本文で言及されている事柄のうちこうした傾向を示す例として適切ではないものを次の中から二つ選び、符号(ア～カの順)で答えよ。

ア 生殖補助医療技術を用いた出産のうち、非配偶者間人工授精(AID)の割合は極めて少ない。

イ 生殖補助医療において、これまではカップルに精子提供や卵子提供をする第三者の匿名性が守られてきた。

ウ 遺伝的なつながりのない子どもと養子縁組をするケースは減少ないし横ばいの状態が続いている。

エ 様々な事情で親と一緒に暮らせない子どもたちが日本には約45000人いる。

オ 日本では里親制度の利用が進んでおらず、OECD諸国のなかで最低の水準である。

カ 養子縁組や里親制度において、子どもに「出自を知る権利」を認めようという動きが出てきている。

問五

傍線２「子どもがたんに生物学上の親の情報を得るだけでなく、生物学上の親に会って直接知ること(acquaintance)が必要」とあるが、その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 実際の体験と違って情報はいくらでも自分に都合よく解釈できてしまうため、現実の親との困難な関係のなかで人間的に成長することが妨げられるから。

イ 子どもは親を模範とし、生活のなかでその振る舞いを真似ることで成長するので、親の情報を得るだけでなく、親と一緒に暮らすことが必要だから。

ウ 自分が他人の目にどう映えるのか把握するためには、自分に外見が似ている親やきょうだいを観察することが最も近道だから。

エ 重要なのは生物学上の親であるかどうかではなく、生物学上の親であれ育ての親であれ、長い時間を一緒に過ごし苦楽を共にすることだから。

オ 子どもはアイデンティティは自分と類似した存在に直接触れ合い、それを鏡として自分自身を見つめることで構築されるため、情報だけでは不十分だから。

カ 子どもは実際に会えば生物学上の親を直観的に見分け、自分の血筋を意識することになり、それが子どものアイデンティティを安定させるから。

問六 空欄①～③に入る最も適切なものを次の中からそれぞれ一つ選び、符号で答えよ。

- ①
- ア 多くの人にとって努力すれば手に入るもの
 - イ 努力だけでは獲得できないもの
 - ウ よりよく生きるために役立つもの
 - エ 一時の選択が一生ついてまわるもの
 - オ 本人が選択して獲得してきたもの
 - カ 育った環境に大きく左右されるもの

- ②
- ア それが将来に及ぼす効果
 - イ それを可能にした社会や時代という背景
 - ウ 自分が大切に思っている人たちからの影響
 - エ どれほど他人に助けられて生きてきたか
 - オ それまでどんな環境で育ってきたか
 - カ いかなる生物学上の親のもとに生まれたか

- ③
- ア 踏み台
 - イ 捨て石
 - ウ 好敵手
 - エ 反面教師
 - オ 頼みの綱
 - カ スケープゴート

問七

傍線3「ある種の「神話」にすぎない」とあるが、ここで「神話」という言葉はどのような意味で用いられているか。最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア 根拠がないのに確かなものと広く信じられている説
- イ 誰かがでっちあげた悪意ある作り話
- ウ 現代では通用しなくなった時代遅れの教訓
- エ 現実には実現不可能な高邁な理想
- オ 個人の想像力が生み出した独創的だが普遍性のない物語
- カ 人知を超えた存在についての荒唐無稽な説明

問八

空欄④に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア この図式を世の中に広く行き渡らせることで、それに自分をあてはめられない人を減らしていくというものだ。
- イ 子どもだけでなくあらゆる人に出自を知る権利を認め、この図式が誰にでもあてはまることを周知するというものだ。
- ウ 権利を保障するのではなく、すべての子どもが自動的に自分の出自を知る仕組みをつくることで、この図式を乗り越えていくというものだ。
- エ この図式に抵抗するために、出自を知る権利をあえて認めないことで、それが不要となる社会を目指すというものだ。
- オ この図式に頼らず独力でアイデンティティを構築できる主体性を育むため、あえて出自を知る権利を認めないというものだ。
- カ この図式の背後にある、子どもは身近な存在を鏡としてアイデンティティを形成するものだという前提自体を問い直すというものだ。

問九 本文の内容と合致するものを次の中から二つ選び、符号（ア～キの順）で答えよ。

ア 「生物学上の親を知りたい」という子どもの欲求を認めることは、育ての親との信頼関係が崩れてしまう可能性が高いので慎重に行うべきである。

イ 生物学上の親を知らない子どもでも、社会のあり方が変われば差別を受けたり悩んだりしなくなる可能性がある。

ウ 日本ではこれまで子どもに生みの親の情報を隠す傾向が強かったことから、他の先進諸国に比べて里親制度が普及していない。

エ 自分のアイデンティティに悩む人が「ルーツ探し」をすることは、血縁や人種を重視する特定の価値観に従うことであり、結局は本人のためにならない。

オ デイヴィッド・ヴェレマンによれば、子どものアイデンティティはただ自分を観察するだけでは構築できず、生物学上の親を通して自分を見つめることや先祖から続く物語のなかに自分を位置づけることが必要である。

カ 現在の北米社会における根強い黒人差別が原因で、白人女性であるサリー・ハスランガーと黒人である養子アイザックとの類似性が見えにくくなっている。

キ 「自然な核家族」図式においては、血縁でつながってさえいれば大家族も自然で普通なこととみなされる。

《注 意》

採点・集計などのさいに受験番号の読み間違いが生じないように、受験番号はつぎの点に注意して記入すること。

1. 受験番号は2箇所に入力する。
2. HBの鉛筆・シャープペンシルを使って、1マス1字ずつはっきり書く。
3. ほかの数字とまぎらわしくないように書く。

良い例	1	3	4	5	6	7
悪い例	1(7)	3(8)	4(6) 4(9)	5(6)	6(4)	7(1) 7(9)

それぞれ（ ）内の数字と誤解されやすい。